

書評 02

田中秀樹 著

『協同の再発見「小さな協同」の 発展と協同組合の未来』

家の光協会 / 2017 年 4 月刊 / 208 ページ / 1800 円 + 税
ISBN 978-4-259-52190-5

評者：緩鹿 泰子

農業・食品産業技術総合研究機構 中央農業研究センター



新たな協同の発展

かつて、農協や生協といった協同組織は、集落や班が協同の基礎単位であったが、合併により大規模化が進んだため、農協や生協は近年、地域コミュニティとの接点が薄れ、衰退している。その一方で、1990 年代頃から高齢化、個別・独立化、グローバル市場化の進展を背景に、くらしの困難の質が変化してきた。そうしたなか、時代の状況に応じ、地域のかかわりを強め、地域づくりの一環として、新たな協同組織が発展している。

新たな協同組織の動きは、地域に協同を生み出し、農業生産や直売所、福祉・介護、医療などの場面において登場しており、筆者は、それらを「小さな協同」としている。この「小さな協同」は、生産や生活の場面で進展している福祉・医療分野における助け合いの協同組織、農業生産場面における集落型農業生産法人、販売協同としての直売所といった協同の取り組みがある。

現在、農協や生協といった協同組合の事業は、組合員の顧客化や社会化傾向を強めており、地域との関係の再構築が課題となっている。そのため、農協や生協といった「大きな協同組合」は、地域とのかかわりが強い「小さな協同」の展開との関連によって、再生を図ろうとしている。

本書のねらいと概要

本書は、農村や地域が疲弊しているなかで、「小さな協同」と呼ばれる住民主体の活動に注目し、各地の事例と成果から、新たな協同の可能性を論じている。

著者は、衰退化している農協や生協といった「大きな協同組合」から、「小さな協同」が登場し、どのように対応すべきかといった問題意識のもと、明らかにしたい点として、第一に「小さな協同」とは何か、第二に「小さな協同」は「大きな協同組合」における協同を再生できるのか、第三に「小さな協同」と「大きな協同組合」の関連構造と「大きな協同組合」の方向性、という 3 点を挙げている。

以下、本書の章ごとの内容を説明したい。

序章『「小さな協同」とは何か』では、農協や生協といった「大きな協同組合」は大規模化によって、地域から離れる傾向が強まるなかで、地域の協同として「小さな協同」が登場し、地域とのかかわりを深め、地域づくりの一環として展開していることに「小さな協同」の歴史的な意義があると論じている。

第 1 章『「小さな協同」としての集落営農の実践と農協』では、労働参加形態を有する集落営農を「小さな協同」として位置づけ、事例として広島県東広島市の農事組合法人「ファームおだ」を取り上げている。同法人では、「小さな協同」のなかに新たな「小さな協同」を生むことで、地域住民の労働参加の機会を多様化さ

せることを通じて、集落営農と農協との関係を論じている。

第2章「農協における助け合い協同の発展と福祉事業の構造」では、長野県のJAあずみの助け合い組織を事例に、福祉事業「あんしん」の発展経緯と事業構造に注目し、助け合い活動のNPO法人化により、農協とのかかわりを変化していることを明らかにしている。

第3章「『おたがいさま』の活動と地域づくり」では、生協を母体として始まった「おたがいさま」を取り上げ、設立や組織のあり方を整理するとともに、「おたがいさま」が生協だけでなく、地域社会づくりにおいても役割を果たしていると論じている。

第4章「ワーカーズコレクティブがつくる『福祉専門生協』」では、福祉クラブ生協の発展経緯を踏まえたうえで、福祉クラブ生協の内部に組織されている「小さな協同」としてのワーカーズ・コレクティブ(W.Co)が福祉の専門生協となり、福祉クラブ生協の事業の中核をなしていると論じている。

第5章「農協における『小さな協同』の発展と農協の展望」では、農協の組合員組織に焦点を当て、農協内部から生まれた「小さな協同」は、組合員が主体となって課題解決のための場であり、組織づくりであると論じている。そして、協同組織があり続けるためには、農協内部の「小さな協同」を育み続けるかどうか、さらに、地域自治組織や社会的課題との関連も問われることを指摘している。

終章「農協・生協を地域の協同のセンターとして」では、全体のまとめとして、「小さな協同」の展開のなかで、農協と生協との関連のあり方や方向性について論じている。「大きな協同組合」である農協や生協は、その内外に生み出した地域の組合員の暮らし起点の「小さな協同」と支援関係を持つことで、地域の協同のセンターとして位置づいていることを明らかにしている。

協同組合と地域との関係の再構築に向けて

このように本書では、地域コミュニティの衰退や急速な高齢化の進展によって現れた「小さな協同」が、農協や生協の組織内部やその周辺において展開されていくなかで、農協や生協といった協同組織を再生し、地域との関係を深めることへの期待が込められている。

本書で取り上げられている事例は、福祉・医療分野への取り組みに重点が置かれており、近年、高齢化が進行するなかで、高齢者福祉の体制をどのように構築するかが地域社会にとって重要な問題である。そのため、農協や生協の関係者にとっても学ぶべき事例が多いと考えられる。

「農協や生協が、地域で活性化しつつある新たな『小さな協同』との積極的連携、さらには新たな協働を積極的に生み出していく戦略(「大きな協同組合のなかに小さな協同組合をつくる」)をとれば、農協や生協内部の協同を活性化させ、ひいては新たな協同組合像を結ぶことになる。」(206ページ)と述べており、今後の農協や生協の方向性にも言及している。

農協では農業生産や農産物販売における事業、生協は生活全般にかかわる事業を行ってきたが、高齢化を背景に、組合員のくらしを支援し、つながり意識を基盤として、高齢者の支援機能を強めることで、本書で紹介されている事例のような福祉に関する事業の専門化・高度化につながっている。

本書で取り上げている「小さな協同」の組織体は法人、NPO、運営委員会、W.Coと多様であり、「大きな協同組合」から独立した「小さな協同」への支援も様々であることから、「小さな協同」を事業化につなげるためには、自立化と自主運営を図ることが必要となる。

本書では、こうした新たな協同として展開されている「小さな協同」の展開から、いまの時代に応じた組合員の課題解決に向けた取り組みが読み取れる一冊である。